小林　茂著

『農耕・景観・災害
――琉球列島の環境史――』

月原　敏博

本書は著者が二〇〇二年に京都大学大学院文学研究科に提出した学位論文「琉球列島における人間―環境関係とその変動――農耕・災害・疾病の分析を通じて――」をもとに刊行されたものである。著者は一九七九年以来二〇年近くに及んだ九州大学在任中に、地の利を生かした地道なフィールド調査と文献調査を積み重ねて多くの論文を執筆した。本書はそのうち琉球列島に関するものを集めて資料を追加するなど大幅な加筆をほどこしてできあがったものであり、著者のライフワークの一つといえる。

最初に章立てを確認しておけば、次のとおりである。

第一章　序論：琉球列島における人間―環境関係と伝統文化

〈第一部　琉球列島のイネ栽培と環境〉

第二章　奄美諸島の伝統的イネ栽培と「踏耕」

第三章　琉球列島のイネの作季とその変動

第四章　琉球列島のイネの作季と環境

第五章　琉球列島におけるイネ栽培の基本性格と系譜論

〈第二部　琉球列島の土地利用と景観〉

第六章　十五世紀後半の琉球列島南部の土地利用と景観：『李朝実録』所載の漂流記録の分析から

第七章　近世―明治期における奄美諸島の土地利用と景観の変動：「糖業モノカルチュア」化を中心に

〈第三部　琉球列島の自然災害と疾病〉

第八章　近世奄美諸島の自然災害

第九章　沖縄諸島における明治三七（一九〇四）年の干ばつ

第十章　近世の琉球列島における天然痘の流行パターンと人痘法の施行

第十一章　結論：琉球列島の人間―環境関係とその変動

書名にも対応して本書は全三部構成のかたちをとり、著者は大きく分けて三つの側面から琉球列島の環境史に迫っている。その第一はイネの品種と栽培技術の系譜論議に関わる農耕の側面であり、第二はサツマイモやサトウキビなどの導入史、およびそうした作物構成変化とも関わる田・畑・森林などの土地利用変化の側面である。そして、第三は干ばつなどの気候災害がもたらす作物への被害と飢饉、また天然痘などの伝染病の流行とそれへの対策という災害の側面である。

まず留意したいのは本書に採用される琉球列島という表現である。あとがきに詳しいが、世上よく用いられる南西諸島という呼称を著者は「日本本土中心の用語」として採用せず、奄美諸島から八重山諸島に至るいわゆる琉球文化圏に属する地域の独自性を意識して琉球列島という呼称を選ぶ。たしかに、本書の初めの数章で著者がいうように柳田國男の『海上の道』など古くから日本の学界では本土中心的な見方からこの地域を捉える傾向がこれまで支配的でその点は学界全体として再考が必要である。著者自身、

南西諸島の語を用いていたが仲松弥秀の言に接して以来このことをしきりと思い出し、また本書の研究過程でイネ栽培技術に見られる琉球列島と本土とのあいだのギャップだけでなく、琉球王国で実施された独自の天然痘対策や奄美諸島の「糖業モノカルチュア」に見られる本土との違いなどをあらためて確認したことが理由となって琉球諸島の語を採用するに至ったと述べている。このことは小事ではない。地誌研究ないしは地域研究としてみた場合、特定地域の地域像をその地域に内在する固有の環境条件と歴史・文化の文脈を中心に据えて把握する姿勢を書き手自身がもつか否かは、研究の基本性格に関わるからである。

ページを追って、順に本書で展開される議論をたどってみよう。

第一部に先立つ第一章では、人間―環境関係の歴史的変動を扱うことが本書の主題であることが述べられるが、ここで琉球列島の環境条件の特色が見事に要約される。透水性が高いために河川水に乏しく土壌が乾きやすい石灰岩台地（隆起サンゴ礁）が多いこと、そうした非火山性地形の土地に対して火山性山地を含む山地・丘陵部が部分的には存在するが、そこでは逆に水条件では有利で森林と水源には相対的にはいくらか恵まれたこと、本土のような沖積平野の発達がないこと、またこうした地質と水条件のあり方に応じて島々をその大きさや高さとの関係から「低い島」と「高い島」とに大別できること、地質・地形だけでなく気候的にも夏季の梅雨明けの晴天期に一時的な乾季が存在することが本土にない特徴であること、などである。そしてこれらの固有の環境条件は琉球列島の作物栽培や人間生活に決定的な影響を及ぼしてきたことが、あとに続く各章の論述で繰り返し示されることになる。

第二章から第五章までの第一部では、イネ栽培を中心に、作物とそれに適用される農耕技術が琉球列島特有の環境条件とどのように関わり、いかに歴史的に展開したのかという農耕の側面からの人間―環境関係とその変化が取り上げられる。膨大な文献資料の細かな分析をフィールドでの聞き取りで補強して、琉球列島に特徴的な伝統的イネ栽培では天水田などでの湏水防止に関わる踏耕の発達が見られたことや、イネの作季は成熟と収穫を夏の小乾季にあわせるもので本土でのそれと異なる特徴をもつこと、その作季は奄美諸島をはじめとして各地で歴史的変動が見られたがそれには品種の交代のほか薩摩藩が進めたサトウキビへの転作という政策が関わっていたこと、琉球列島の伝統的イネ栽培の系譜論を考えるうえでは品種や作季の点で東アジア南部や東南アジアの一部地域との類似性とともに本土とのギャップを意識すべきすること、などが指摘される。

第六章から第七章までの第二部では、サツマイモやサトウキビの導入史も含めた作物構成変化やそれと関わる田・畑・森林などの土地利用景観の変化が、人口や食料の変化とともに論じられる。ここでは、列島南部については『李朝実録』など大陸側に残された漂流記録に含まれる情報から田畑や森林など土地利用の状況を復元して「低い島」と「高い島」とではそれに大きな違いが見られたことや、マラリア感染を防ぐことと関わった遠距離通耕が存在したことの意義が指摘される。そして、列島北部の奄美諸島については薩摩藩内に残された歴史資料などから同藩によるサトウキビ導入によって「糖業モノカルチュア」という栽培特化が生じ

たこと、さらにそれがサツマイモ栽培の拡大もともなっていたが、サツマイモの栽培は収穫量が多く主食用の作物の地位を占めるに至った反面で、寒さに弱く保存性に乏しいなどの理由から比較的頻繁に不作を生じ、サツマイモは食料基盤としては不安定さも同時にもった作物であったことなどが指摘される。

第八章から第十章までの第三部では、干ばつや台風などの気候災害がもたらす作物への被害と飢饉の実態、また天然痘などの伝染病の流行とそれに対してとられていた対策が分析される。ここではまず把握しうる限りの文献資料から作成された災害年表を中心に奄美諸島の災害の特色や発生パターンが分析され、飢饉に至った例が検討される。ついで沖縄諸島について明治期の干ばつが各種作物の不作をもたらした被害状況をたどり、干ばつには冬季の低温がともない、とくにサツマイモへの被害が大きかったことが指摘される。そして最後に、従来論じられることが少なかった疾病と環境条件及び人口の変化との関係について、クリフとハゲットのモデルを適用して琉球列島における天然痘流行の時空間パターンを読み取り、それに対するいくつかの対策の一つとして琉球王国下の沖縄諸島で実施されていた「人痘法」という特殊な免疫措置の効果とその普及過程が分析される。この伝染病の分析においては島嶼という地理的条件のもった意味を改めて考えさせられる論考となっている。

最終章の第十一章では、本書全体の論考が整理されて著者が理解する琉球列島の人間―環境関係とその歴史的変動が概観され、文献リストに続くあとがきでは、とくに本書で琉球列島という用語を採用した理由などが述べられる。

本書を通読してみれば、著者が扱った大きく分けて三つの側面は、琉球列島で展開した人間―環境関係史の全体像を復元し、また同時にこの地域の個性を適切に理解するためにはいずれも不可欠の「部分」にほかならないことが納得される。継続的で定常的な面が強い農耕とは一見関わりが薄く、突発的で非常的な面が強い災害や伝染病までが扱われることで、地域の環境史としてはかえってバランスが取れる結果が得られている。著者は個々の「部分」の記述においてはいずれも各論にすぎないというような堅実で控えめな書き方をしているが、その積み重ねから徐々に見えてくるのは「部分」と「部分」のあいだに存在する網の目のような相互作用であったり、またいずれの「部分」においてもこの地域に固有の環境条件が多大な影響を及ぼしているという環境影響の大きさである。結果として、本書では周到な実証主義の基礎のうえに多面的で壮大な人間―環境関係史の骨組みとその諸相が立ち現れるように記述されている。

「部分」の列挙が書名になっているために書名の本題だけを見ると読者は一見ばらばらな印象を受け、本書全体の性格をよりよく表しているのは書名ではむしろ副題の方であることに気付くのだが、各「部分」の記述に力が割かれることで、読み進めるほどにその「全体」が姿を見せるという書き方が本書では採用されているわけである。これらの「部分」を詳しく取り上げることなしに琉球列島の人間―環境関係史の全体像に近づくことは困難であり正当でもないということを著者は主張として読者に突きつけているようにも受け取れる。どの章の論述をみても先行研究の周到なトレースがなされたうえで著者自身の到達した個々の見解が示

されて先行研究との違いが述べられているので、著者の研究の個々が本論全体の文脈のなかだけでなく個別研究分野の中で占める位置づけも明確なものになっている。著者はその畏友の久武哲也と並んで欧米の文化地理学の研究動向にも日本国内ではもっとも注意を払ってきた研究者であるだけに、関係分野における先行研究への目配りは行き届いたものである。

さて、評者自身は琉球列島を専門とする者ではないため本書に現れる論考の細部にあれこれコメントする資格には欠ける。が、著者と同じく文化地理学の立場から人間―環境関係を学ぶ後続として、本書によって気付いたり学んだりできたことは少なくない。それは、おもに研究者としての著者を育んだ背景や、文化地理学や地域研究、環境史（または環境誌）研究が抱えている研究方法の問題に関わっている。ここではそれを記して琉球列島をめぐる細かなコメントに代えたい。

研究者としての背景でいうと、著者は京都大学文学部の地理学教室を巣立ったが、教室の伝統である歴史地理学とは別に、民族学の梅棹忠夫や川喜田二郎にも大きな影響を受けた研究者であることが知られる。それは本書のなかでもうかがうことができる。たとえば、本書で一貫して採られている記述のスタイルは、論を展開する地の文のあいだに文献資料から抜き出した文章を次々と挟みこんで引用しつつ書き進めるものだが、この書き方は梅棹が若い頃に書いた「草刈るモンゴル」という名論文からヒントを得たもののように思われる。また、第七章で著者独自の換算法を考案して歴史資料から奄美諸島の島ごとの作物生産量をエネルギー（カロリー）量に換算して食料源としてのサツマイモの占める大きさを議論する部分は、川喜田の初期の研究に含まれた「土地生産力に関わるカロリー計算」の関心を引き継いだものと想像されるところがある。また、著者はネパールヒマラヤなどで九州大学の医学研究者たちと一九八〇年代以降数度にわたって村落共同調査等を実施しており、その後も独自の観点からヒマラヤ山麓のマラリアの研究などを行っているが、本書で示される疾病研究は、そうした医学研究者との共同研究のなかで育まれた関心や意見交換と無関係ではないだろう。

ただし、フィールド調査で集めたデータをもとに論文を書くことでいちばん本領を発揮した梅棹や川喜田と比べると、少なくとも本書の範囲では著者がその方法的なところでは彼らに近くなく、本書の研究はフィールド調査データではない文献データの分析と整理とでほとんどすべてが成り立っている。無数の引用文のほか資料から情報を抜き出して作成された表が本書には数多く含まれるのに対して、地図などによる図解が限られる点もこの性格を補強しており、フィールド調査データで組み上げられた海外フィールドでの著者による研究成果とも毛色が異なっている。地理的には奄美諸島、沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島から構成される琉球列島内部の地域性の違いも本書では必ずしもわかりやすい記述とはなってはいないから、この地域内部の地域差や地域構造の問題は主な主題とはなっていない。とはいえ、本書の扱う環境史の時間範囲は現在のフィールド調査で得られる景観観察や古老からの聞き取りではとうていたどれない一五世紀後半から近現代までという長さを持っており、また扱われる事象も多岐にわたるので、文献資料中心になるのももっともなことである。フィールド調査

と文献資料読解のいずれの経験にも富む著者は、それぞれの有効性をよくわきまえたうえで本書の研究を進めているはずで、その見きわめ自体に文化地理学や地域研究が抱える研究方法の問題を考えるうえで学ぶべき点が多いと考えられる。その方法論自体は本書に中には詳しく書かれてはいないが、著者に直接会って意見を聞きたいところである。

近年の地域研究では、理系出身者が専門分野を生かして活躍する例は少なくない。著者自身も本書で述べていることであるが、彼らにはフィールド調査データを重視する一方で歴史資料の調査と分析が不十分な傾向がある。一方で、文献派の研究者はともすれば資料から構築される宇宙に落ち込んで地域の現実・現場との通信を忘れがちになり、フィールド調査から斬新な着想や状況証拠を得たり現在観察可能なことがらから過去を再構成することに消極的な傾向がある。文献派かフィールド派か、文系か理系か、歴史派か地理派、といった仕切りはある程度は入り組んではいるものの、〈フィールド－理系－地理〉派と〈文献－文系－歴史〉派という大まかな括りと対立は、やはり文化地理学や地域研究、もっといえば歴史人類学や環境社会学も含めてわれわれが抱える方法論上の大問題である。

著者は文系出身の地理学者であり、人文地理、文化地理の立場に身を置きながらも本書で扱われる事象は今日では理系の専門家が揃っているものばかりである。フンボルト以来の地理学の一つの理想は文理融合的立場から個々の地域そして地球の全体像を理解しようとするが、その成功は容易ではない。文理融合は御題目としては長らく言われてきているものの、異分野の専門家を集める共同研究ならまだしも、研究者個人の内側でこれだけの融合を意識的にやり遂げた著者の例は、非常に貴重な手本である。資料を用いた実証に力を尽くされた著者には実証史学の魂を感じることができるだけではない。文献資料と先行研究の探索過程では多数の理系の学部などを含む外部の書庫で時間と労力を割いたり、異分野の専門家と議論することを重ねた著者の姿が目に浮かぶし、あるいはフィールド調査の感覚と態度で文献の調査・読解を進めたからこそ疾病や災害のもつ環境史上の重要性をすなおに受け入れられたとも想像される。評者は、このような地理学研究を文科と理科にまたがる意味でひそかに「二科兼学の地理学」と名付けているのだが、著者の場合はその学びと文献探索の範囲が尋常ではない。学部学科で数えると五科以上にもわたる「多科兼学の地理学」というべきもので、余人にはなかなか真似できるものではない。その意味で、著者の研究態度には深く敬意を表したい。

以上、本書は、文化地理学からする環境史研究が、いかに人間――環境関係史を立体的にしかも広がりと深みをもって描き出すことができるかを示しえた貴重な例であるといいうる。個別研究が多様化・細分化を深めるなかで、それを乗越えて地域的な特性を総合的・体系的に把握して全体像を探求する研究であり、隣接諸分野にも様々な刺激を与えるものであることは疑いがない。そうした点などから、本書は地理学界でもすでに高い評価を得ており、出版の翌年には人文地理学会の学会賞も受賞している。評者自身は同門・同分野の後輩としてヒマラヤ地域の研究などでは著者には少なからず助言もいただいてきたので先生とお呼びしてもおかしくない関係にあり恐縮ではあるが、後続研究者として、本書を

どのように読んだか率直に記させていただいた。

（A五判　三九〇頁　二〇〇三年六月　第一書房　税込八四〇〇円）

（福井大学教育地域科学部教授）